第１章　民間ユネスコ運動誕生記

昭和２２年７月１９日、戦後の混乱した世相今だ定まらないこの日、仙台に世界で初めての民間ユネスコ運動を推進する組織「仙台ユネスコ協力会」が誕生した。

爾来今日まで民間ユネスコ運動は、日本はもとより世界中の恒久平和を希求する人々によって広められ、今では日本に約３００、世界各国に約６，０００ものクラブが設立され、「ユネスコの理念を市民の中に浸透していくためには、地域に根ざした自発的なクラブ活動がユネスコの最も重要なパートナーである」（ユネスコ松浦晃一郎事務局長）と高く評価されている。

仙台の地に民間ユネスコ運動の灯が点されて早や６０年、人間で言えば６０歳は還暦、新しい人生の節目に当たる。今こそ「温故知新」創設時の先達の高邁な「平和への志」を学び、新たな民間ユネスコ運動の指針を示し次の世代に引き継いでいくことが求められている。

社団法人仙台ユネスコ協会は、ここに創立６０周年を迎えるにあたり、改めて「仙台ユネスコ協力会」が誕生した経緯と先達の足跡を辿り、今後のユネスコ運動のあるべき道を構築する糧としたい。

第１節 仙台ユネスコ協力會の設立経過

１ ユネスコ協力會の構想

仙台ユネスコ協力会の初代事務局長、上田康一氏（外務省東北終戦連絡事務局連絡官）は、昭和２１年１１月２５日付朝日新聞で、第１回ユネスコ総会がパリで開催されたという記事の中に、ユネスコ憲章の前文「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とあるのを読んで深い感銘を覚えた。これが上田氏とユネスコとの出会いであり、仙台に民間ユネスコ運動が芽生えるきっかけとなったのである。

（１）協力会の構想

ユネスコのことを知った上田康一氏は、その後ひたすらユネスコの資料の収集に努め、ユネスコへの理解が深まるにつれて、ユネスコを多くの日本人に知らせ、理解させ、更にユネスコへの協力を進めるためには、強力な民衆運動を展開する必要があると考えた。

そのためには組織的な活動母体として「ユネスコ協力会」というような団体の結成が必要との結論に達した。

（２）設立準備

昭和２２年５月になって上田康一氏は、ユネスコ協力会設立の具体的準備に入り、まず協力会規約の草案に取りかかった。

また、設立準備委員と役員候補者は、東北大学の学長や教授を中心に人選することになり、東北大学の土居光知教授（後に仙台ユネスコ協力会第二代会長）に協力要請を行い、快諾を得た。

２ 設立準備委員会

第１回設立準備委員会は、同年６月１６日終戦連絡事務局において開催された。

役員人事の協議では、会長に東北大学総長佐武安太郎氏を推薦することとし、その他評議員、幹事の候補者を決定、また、発会式は７月１９日東北大学講堂で開催することが決定された。

以後設立準備委員会は、７月に３回開催され、特に７月１５日にはパリのユネスコ本部宛てに発会挨拶状を送付することが、決定され、一切の準備が完了し、７月１９日を迎えるばかりとなった。

（ここまでの経過については、上田康一氏の著書『民間ユネスコ活動の始まり－ユネスコと私－』を参考としたが、昭和２２年７月１４日付『ユネスコ協力会会報第一号』には、「仙台ユネスコ協力会の設立経過」として、次のように報告されている。

以上の主旨に賛同される方の入會、各方面の參加を望んでいる。

昭和二十二年七月十四日

ユネスコ協力會

◎ユネスコ協力會の設立經過

昨年十一月、パリのソルボンヌ大學で開催された第一回ユネスコ總會の模樣は、當時我が國の主要新聞に掲載され、教育科學文化によつて世界の恆久平和の地固めに乘り出した歴史的な動きとして、國際文化あるいは世界平和に關心を有する人々の間に大きなショックを與えた。

仙臺に於ても、このユネスコを理解せんとする努力が東北大學、終戰連絡東北事務局等の一部の人々の間に起り始め、各種の基礎資料の蒐集と研究が個々に始められた。理解が進むにつれて、この人達の間に、現在の我が國が平和な文化國家を建設するに當つてユネスコの思想を理解すること、そして更にユネスコ精神の理解を促進するためには將來設立を豫定される日本國内委員會に協力する國民に根を下した國民運動の必要が痛感されるに至つた。

ここに於てユネスコ及びその思想を廣く一般に理解させるとともにその事業に積極的に協力するためにまとまつた團體を結成することの必要が感ぜられるに至り、大學、終連、放送、新聞關係等の有志は一體となつて「ユネスコ協力會」の構想の下にその設立に乘り出すことになつた。この機運は佐武東北大總長、大江終連東北事務局長の積極的な支持と理解を得て、更に一段と進展した。

六月二十九日に土居光知準備委員長の下に第一回の準備委員會を開催して以來、四回の準備委員會に於て、協力會規約草案の審議、事業計畫案、聲明案及びパリー本部宛發會通知案などの檢討を矢繼早に行い、七月十九日「ユネスコ協力會」の發會講演會を行うことに決まつた。

この間上田準備委員は上京して各方面と連絡し機運を打診したところ、多大な賛同と支持を得、發會講演會の御膳立も出來て、十九日、全日本に魁けて學都仙臺に於てユネスコ協力會の發會が講演會を兼ねて行われるに至つたのである。

ユネスコ協力會設立準備委員（イロハ順）

酉村貞二　金倉英一　小谷鶴次
細谷恒夫　村岡　勇　安積　宏
土居光知　村田　潔　佐藤　彰
大川　茂　上田康一　木村龜二
生出幸夫　桑原武夫　榛葉英治

また、『ユネスコ協力会会報第一号』で、「仙台ユネスコ協力会設立の主旨」を次のように発表して、仙台市民に設立の主旨に賛同される方々の入会、参加を望む旨、呼びかけている。

◎ユネスコ協力會設立の主旨

日本が武器を棄て、文化の力で平和國家を建設せんとしている時、日本が世界の平和に依存しなければならない面は他の何れの國よりも強い。この時ユネスコが世界のあらゆる國家の教育、科學、文化の叡智を動員して、眞に不動の世界の恆久平和の建設にその第一歩を踏み出したことは我々の最大の歡喜でなければならない。

ユネスコとは UNESCO (The United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization) 即ち國際聯合教育科學文化機關のことである。ユネスコは過去の平和維持の方法としての各種の政治的經濟的取りきめだけでは、完全に戰爭を防止し得ないこと、眞に不動の平和の基礎は人間の心の中に先づ打ちたてられねばならないことの認識から出發し、教育科學文化を世界的規模に於て廣く交流せしめ、相互理解を促進し、根本の「土臺」から平和の建設にあたらうとしている。即ち最も困難であるが、最も確實な方法を地道に一歩一歩押し進めんとしている。

我々がこゝにユネスコの思想にもとづき、直接、間接にその事業に協力することは、平和的な文化國家を建設する爲に必要なばかりでなく、人類共同の目標である恆久平和建設の爲にも、我々に課せられた使命であることが痛感される。日本こそユネスコの思想の最も好き理解者となる素地が出來て居り、日本こそユネスコの最も強い支持者とならねばならないとさえ考えられる。

我々は全國に魁けていち早く本會を設立し、國際的文化交流と恆久平和の建設を目標として活潑に各種の事業を展開せんとしているが、本會設立の主旨は將來日本にも設立を豫想されるユネスコ國内委員會を通じ、これに協力してユネスコの實施する諸活動を援助し、廣く國内各層にユネスコの理解とユネスコへの協力者を求めようとするにある。從つて本會にはユネスコの精神に共鳴し國際文化に關心を持つものは誰でも入會し得る所にその國民的組織としての特殊性をもつものである。

以上の主旨に基き、本會は各方面の絶大なる共鳴と援助によつて、共に日本の國際的地位の回復を圖りたいと考えている。昨年十一月の第一回パリ總會に引續き第二回總會は本年十一月メキシコに於て開催の豫定になつている。本會は廣く日本國内外の人々の間にユネスコへの關心を深めるとともに速かにユネスコ參加の機會を摑んで自ら進んで以て世界の平和と文化の愛好者と共に、ユネスコを通じユネスコと共に恆久平和の建設に貢献したいとの固い決意を有するものである。

上田康一氏がユネスコのことを知った昭和２１年１１月２５日付朝日新聞の記事

昭和二十一年十一月二十五日　月曜　日刊　朝日新聞

朝日新聞（日刊）
社本東京朝日新聞社

世界平和の地固め

國境越えて文化の交流

ユネスコ開く

新世界音楽

パリではいま『ユネスコ』が市民の人氣をさらつている、繪畫展、映畫祭、音樂會、科學講演などとりくの文化的催しが毎日々々つゞいている、これらはみんな『ユネスコ』を記念するために開かれているのだ、パリの十一月は『ユネスコの月』だとパリジャンは口にしているが

ユネスコの開幕はひとりパリのでき事ばかりでなく、ヨーロッパの、そしてを世界の大きなでき事なのである

ユネスコ？目なれない呼称だ、一体何だろう、大抵の人が首をかしげるのも無理はない、ところがこれは國際聯合の一機関のUNESCO（國際聯合教育科學文化機構）なのだ、國際勞働組織農業、國際民間航空の聯絡機構とくもに經濟社會理事會の下にあつて、國際復興開發銀行、國際通貨基金さらに國際保健および國際難民機構などの國際協力機関と手をつなぎながら、ともすれば國際対立の面だけが大きく浮び上つてくる國聯總會や安全保障理事會のかたわらで、文化の交流と相互理解を通してこつ〳〵と地道な本和の地固めの仕事をやろうとして生れたもの、その第一

同總會がこの十九日からソルボンヌ大學でひらかれているのだ

國際文化憲章はる

昨年十一月、米英をはじめ二十ケ國の文化指導者や關係政府の代表者はロンドンに集り、わずか半月の討議で巨大な國際文化憲章の草案を作りあげた、これは同年八月廣島に投下された原子爆彈の威力が、これを用ゐる人類の惨憺いかんによつては、世界は永遠の破滅に陥入るかの脅かの脅威を感じたからだつた

草案は本年三月の會議で採擇、こんどの總會はこれをもとすいて總數の調定、常任執行委員會の設置など機構の肉づけと、具体的測領の作成というこの新しい國際機関が野心的な試みに向つて現実に動きだすためのいわば初の相談會だ、本部はパリとすでに決定している

十九日、開會に當つてビドー佛蘭西大統領はリオン大學の歴史學の權威ビドー教授にかえつて、歴史の講をのべた、そしてレオン・ブルム氏が社會黎明期という題目をぬきすて、かつての作家ブルムになつて聯合に連なれた

裏まるる米の詩人マックリーシュ（國務省文化局長）前日教育連盟會長だつたストッダード博士ニューヨーク・タイムスの女流評論家ジン・マコーミック、英の自然科學者ハックスリレー教授そのほかジョリオ・キューリー、アンナ・フロイド、アンドレ・マルロー、ポール・サルトル、エルベ・レードなど各國一流の文化指導者ただちにユネスコの出発は第二次世界大戰はファッシズムと民主主義との鬪爭であつたという基本認識に立つている「戰爭の原因は政治的なもの、經濟的なものいくたあつたであろう、そしてそれぞれの原因には、いずれものつびきならないものがあつたであろう、だが今次大戰の右の性格を見失うことは、戰後世界の在り方を誤るものでなければならない、戰爭の力こそ、原子力にまして想像が破壊か、その正しい方向づけを必要とする、しかもそれを必要とすることは、いまの時代と尋なるものはない」――これが憲章にもられたユネスコの主張である

アメリカが推進力

これは米の理想の線でも同調する、ニューヨークの國聯總會々場の正面壁面を飾る緑一色でぬりつぶされた「二つの世界」の壁畫、これに象徴される米の世界政策は、ユネスコの文化活動によつて擁護することも可能だ、「ユネスコ憲章の採擇は、たゞに米國の最善の利益に合致するのみでなく、全世界の利益でもある」憲章原案の起草者マックリーシュ米代表はロンドン會議の席上でこう全米代表部の所信を明かにしている

したがつてユネスコの推進力が米にあることは當然であろう　今回の總會の議題の中心は

一、ニュースの國家独占を破壊し世界の文化交流をとりのけるため、國際聯合憲章のラジオ通信網を設置する（予算二億五千万ドル）

一、學生、教授、著作家、科學者の國際交換

一、版權および檢閲制度撤廃の國際暫定の締結

一、文盲追放の國際運動

一、超國家主義的教育を防ぐために世界の教科書改訂會議を開催する

などいずれも米の提案となつている、憲章批准國二十八ケ國、そのうち本會議に出席している國家二十二、しかもソ聯は参加していない

「世界のもつとも進んだ国の一つであるソ聯が参加しなければユネスコは事実世界的な機関として機能を果しえない、この意味からソ聯の参加をとくに切望する」

事務總長ハックスリレー教授は、廿一日こうソ聯の参加を訴えている、だが、「二つの世界」と「文化の階級性」をテーゼとするソ聯の立場は、「教育と文化にかんする限りすでに西欧に期待すべきものは何もない」と、つよく自負するとすれば、おのずから独自のものがあるのだろう

とまれ、文化人たちが國際的に「政治する」この最初の機會を「戰後もつとも意義ある會議」として正しく実らせるか『廿世紀の大きな紙風船』としておわらせるかは、世界の文化人たちの共同関心事であろう

青年の書
第四回受験三冊申込分発送ずみ
付開始！　刷出来一口から口へ
かえす本書の人気〈世
ロマンス
十二月号▲歌▲お巡り
十三日▲三六五▲枕・吉屋信▲小島政二郎▲高橋三
十三〇▲樹▲熱田村泰次郎▲百野